

『土佐日記』の方法

－「前の守」と「船君」と－

関 丙 勲*

(e-mail: mbh0301@dju.kr)

目次

- 一、はじめに
 - 二、視角の変化
 - 三、前の守から船君へ
 - 四、日記の文学化
 - 五、終わりに
-

一、はじめに

周知のように、『土佐日記』は、多くの和歌を含んでいるが、仮名を用いて日常における人間の心理と自然にたいする感想とを散文に綴ったもので、まだ日誌にすぎなかった日記を文学に昇格させた、いわゆる日記文学の初めとなる作品である。貫之は『土佐日記』に先立って『古今和歌集』を編纂し、その「仮名序」を執筆している。また『新撰和歌』の制作に取り掛かり、歌物語の『伊勢物語』の増補の過程にも携わった可能性が高いといわれている。さらに、屏風歌専門ともいわれるように、皇族や上達部のためにたくさんの屏風歌を作っている。つまり、和歌に関しては当代第一人者であったわけである。そのため、萩谷朴氏は、『土佐日記』は本来、日記や紀行ではなく、和歌初学入門の年少男子を当初読者として編まれた歌論書であると主張しているぐらいである¹⁾。69首にのぼる和歌の数を見るだけで十分納得のいく言説で、一理ある見解といえる。様々な背景から詠ま

* 大田大学校 日語日文学科 副教授 日本古典専攻

1) 萩谷朴「虚構と歪曲の作品『土佐日記』」『日本文学研究』第三十九号、大東文化大学日本文学会、2000、p.2

れた和歌を取り入れ、しかも適所に子どもの詠む歌をも載せており、和歌の批評書としての性格があらゆる所に点在している。

しかし、書名や冒頭に日記と表していることをはじめ、前半部の繰り返される宴会の様子、子どもまで酒に酔いしれる場面、女性が下半身を洗う猥褻的な描写、また、いろんな人を滑稽の対象にしたりするところなど、やはり構成が複雑で、歌論書にするには相当の無理が感じられる。もちろん、当初貫之は歌論書のつもりでものを書きはじめたのかも知れない。ただ、最初の意図はどうであれ、流布の時点では、送別の有様を長々と語る冒頭部をはじめ、大人を意識した話が多いことから、紀行を背景にした日記文学として作者の手から離れたとみるのが妥当であろう。もしくは、『土佐日記』の歌論書や申文としての性格は、逆に、村瀬敏夫氏が言っているように、書いていくうちに、そのような効果が派生したとみるのが相応しいのかも知れない²⁾。氏は執筆意図の一つとして、王朝人の行動範囲の狭さからくる見知らぬ遠国に対する関心が強く、そうした都人、ことに女性の需めに応じたのが『土佐日記』であったとし、それが女性に仮託して仮名日記を書いたこととも関係があるとみている³⁾。確かに作品の表面からすると、時代柄として仮名文は主に女性の享受するものと言っているが、やはり、「仮名日記」という真新しいもの、特に地方官としての任期を終えた主人を中心とした人の群れの航海の様子は、女性のみならず多くの貴族に新鮮な興味を与えた筈である。恵慶⁴⁾という歌僧が『前田家本恵慶集』に「貫之が土左の日記を絵にかけるを」と書いているところからも、貫之の『土佐日記』が当時として幅広く話題になっていたことが想像できる。これらは結局、鈴木知太郎氏が述べるように、女流文芸のみならず、新日本文芸の行くべき道を開拓することになるのである⁵⁾。

ところで、作品を読んでいると、日記の展開において節目となる所がみられ、そこに書き手の視角に変化が生じていることが観察される。本稿ではその点に注目して、作品として『土佐日記』が追求するものは何か探してみたいと思う。

日記は女性目から見た、土佐での門出から京都に到る55日間に亘る旅を書き記すもののようなのだが、やはり視線の届くところは、大津から船出する前後は「前の守」の周辺であり、何か所かの停泊地を経るうちに、いつからともなく「船君」の名を持った人物の周りへと移っていることがわかる。ここでの前の守・船君、両方とも貫之を指すものと普遍化しているが、明確に呼称の異同が見られるのである。実際、日記の中心を成しているはずの貫之の様子は、舞台が土佐を離れ、航海していく内に変わっていき、ある地点に至るとまるで別

2) 村瀬敏夫訳注『現代語訳対照土佐日記』解説「『土佐日記』について」旺文社文庫、1981、pp.147～148

3) 「当時漢文は男子の独占物だったから、仮名文の日記ということになれば、その享受対象は当然女子が中心となる。貫之は女性の読者を意識して、この日記を書いたとせざるを得ない。」注2)のp.147

4) 恵慶は貫之の息子の時文と親交があった歌僧。『恵慶集』のことは、松村誠一校注・訳『土佐日記』解説部、p.6に拠る。

5) 鈴木知太郎校注『土佐日記』「日本古典文学大系」解説、四文芸史的位置および意義、岩波書店、1957、p.15

人のような雰囲気を漂わせている。さらに、女性が日記の作者であるならば当然周りには女性が多かったはずだが、文中には男性の様子が多くと多く描かれ、むしろ男性の目から見た情景が圧倒的に多いことがわかる。

本稿では、『土佐日記』において書き手の視角に変化が生じている個所と、紀貫之が「前の守」や「船君」「船の長」の名をもって登場する所とを取り上げ、作者とされる貫之の方法について考察してみたいと思う。同一人物でありながら、場面によって呼称を変え、それぞれ、異なるイメージを与えていることが確認できるが、従来の研究には、なぜ作者の貫之が日記において彼自身の呼称に統一性を持たせていなかったのか、問題提起したものはない。実は、そこには作品の構造における作者の工夫が反映されているのである。

二、視角の変化

廿三日。八木のやすのりといふ人あり。この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。これぞ、たゞはしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、国人の心の常として、「今は」とて見へぎなるを、心ある者は、恥ぢ ずになむ来ける。これは、物によりて褒むるにしもあらず6)。

これは、貫之が前の守として登場した初めての記録である。前任者はもう帰る立場であり、礼などいわなくていいのにわざわざ饞別に來る人が多いのは、前の守の人柄が良かったためだろうか、と褒めるような内容である。この辺は貫之自らが書いたものになると自画自賛の表現になるので、やはり別の話し手が必要だったのであろう。このような所からもやはり女性仮託の原因を求めることができよう。それはともかく、引用文は前の守にたいして肯定的な評価をしていると解釈できるものと思われる。このような饞に來るたくさんの人によって別れを惜しむ様子を描き、前の守が仁徳ある地方官だったことを裏付ける内容が以下にも続く。筆者は以前、「『土佐日記』に見る送別の諸相」において、貫之の著作意図について書いたが、長々と続くあらゆる送別の様子から、土佐の守としての任を立派に果たしたことを仄めかす内容が多く、帰京してから無職だった時分、日記を書き、新しい職を求めようとする作意が窺われるということ論じた7)。萩谷朴氏も言っているように、歌人としての才能を醍醐天皇が過度に重用したことは、逆に、官僚社会に生きる貫之には、律令官人としての行政的実績を挙げる機会が失われることを意味する8)。特に、土佐から京都に帰ってきたのは

6) 長谷川政春校注『土佐日記』「新日本古典文学大系」岩波書店、1989、pp.3~4

7) 関丙勲「『土佐日記』に見る送別の諸相」『日本語文学』49輯、韓国日本語学会、2011、pp.167~187

8) 注1)に同じ

65歳の時だから、職を求めるのは余計に難しかったと思われる。いずれにしても、作者の貫之が前の守を表す視点は、どちらかといえば客観的で事務的な色彩が濃いことがわかる。

さて、二回目の前の守の登場は、新任の守から招待を受け、官舎にわざわざ出向いた時に見えている。官舎で夜通しで宴をし、翌日もなお盛大な送別の宴会が続くのである。ことにここは、前の守が初めて歌を詠む様子が描かれており、新任の守の送別歌に返しをする、贈答の形で詠まれている。以下のようにある。

都出でて君に逢はむと来しものを来しかひもなく別れぬるかな
となむありければ、帰る前の守の詠めりける、

白栲の波路を遠く行き交ひて我に似べきは誰ならなくに
他人他人のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかくいひて、前の守、今のも、もろともに
下りて、今的主人も、前のも、手とり交して、酔言にこころよげなる言して、出で入りにけり。9)

二首目の前の守の歌について、後任の守を皮肉る内容を秘めているとの見解があるが¹⁰⁾、贈答の前後に、歌にたいする評価が見られないところから、歌の優劣は勿論、前の守の歌から後任の守を揶揄する意味があるとは一概にはいえないものがある。前述のように、確かに『土佐日記』には歌論書の性格があり、その根拠は至るところに見られている。ことに、歌の良し悪しを語るときには歌を二首並べて、対応関係を作っているのが普通である。しかし、不思議と日記の前半にはそのような印象は薄く、贈答歌であるこの一・二番歌は勿論、三番歌に関しても何の言及もなく、続く四番歌についても「と言ひける間に」とあるだけで、これといった批評は加えられていない。五番歌にたいしては初めて「いといたく賞でて、行く人の詠めりける」と、別れがたく思う人の詠じた送別歌を称賛する内容が確認される。だが、やはり、それに続く返歌にも特別な言及はない。

三章で述べるが、後に貫之が「船君」の名をもって歌を詠むたびに書き手は批評を加え、滑稽な説明を付していることがわかる。ところが、ここでは前の守の歌に関しての皮肉めいた批評は見出せない。しかも、松田武夫氏が「多少は専門家人めいた詠である。

『白たへの』がよく利いているし、下の句の言い方が素人ではこうは詠めない¹¹⁾」といているように、前の守の詠んだ歌と船君の詠んだ歌とでは品格の差が判然としているのである。前述のように、同一人ではないような扱い方である。

調べたところ、歌にたいしての本格的な評価は、以下で述べる七番目の歌から始まっており、それ以前の歌に関してはこれといった批評は付されていない。言い換えれば、日記の

9) 注6)のp.4

10) 松村誠一注校・訳『土佐日記』「日本古典文学全集」頭注、1973、p.31。他、萩谷朴『土佐日記全注釈』角川書店、1984年版、p.86

11) 松田武夫「紀貫之」『中古の和歌』所収、日本歌人講座2、弘文堂、1968、p.133

前の部分は女性に仮託している分、第三者の立場からまじめな態度でものを見ており、それが、大津より浦戸を経て大湊に着いてから一変しているのである。つまり、港を幾つか経るうちに、書き手の性格に変化が見えてくるのである。特に歌に関する批評が加えられる地点はここからである。それはまた、「前の守」から「船君」へと呼称が変わることとも並行し、いろんな面で日記に変化が生じているのである。

歌も、六番歌までは、別れを惜しむ歌にたいして、それに応える贈答歌、あるいは一緒に帰れない死んだ子供への思いを歌うものになっており、どちらかといえば、物事を客観的に捉えているような雰囲気、まるで第三者の立場で状況を描いているような印象が強い。もちろん、最初は「女のわたし」の視角だから一人称のはずだが、やはりものの見方は三人称のようで、淡々と話を描いていくのである。

しかし、七番目の歌の所からは、その殆んどが贈答の形式は取っておらず、また、歌にたいする批評が付くようになる。つまり、作品の性格が変わっているのである。とても主観的な立場から情景を解釈し、あたかも、歌合での判者のように、左右のまん中で詠歌の良し悪しを定める者のような印象があり、ことに面白いのは、直接、口ではいえない皮肉を心中からこぼしていくような方法を用いて、滑稽性が増すところである。微妙な点を巧みに言い表す、一種の「穿ち」の技法である。また、それによって人物描写がより仔細になってくるのである。

それでは、正月7日から見られる滑稽性について追及してみたい。正月7日には、まだ送別に伴う餞の様子は終わらない。それまでは、名前さえ出しており、餞と歌を詠んだ人が誰なのかを露にする書き振りである。しかし、この辺からは話に関わる人の存在をぼやかしており、そのうえ、歌に対する批評が強まるのである。

たとえば、七番歌と八番歌にたいする評価は明確に勝ち負けがついており、ことに、負けの人を徹底的に貶している様相を帯びる。

浅茅生の野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり

この七番目の歌の詠み手は女性で、朝廷で白馬節会が行われる日に合わせて、長櫃に魚や若菜など、いろんな品を入れて、誠意を込めて贈ってきたとある。また、そこに歌が添えられていたのである。この歌について書き手は、

いとおかしかし。この池といふは、所の名なり。よき人の、男につきて下りて、住みけるなり。

と褒めており、贈られた物を船に乗っている人が皆、満腹になるまで飽食したとの内容が続く。それに対して、その次の歌の詠み主は子供にまで貶される歌を歌い、周囲の反応が気

まずくなり、惨めにもこっそりとその場を去らなければならない境遇にあう。前の人が唐櫃に品を贈ったのに対し、この人は破籠に食物を入れて直接持ってくるが、目的は自分の歌を披露したいためであると書き手は振っている。

その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌詠まむ、と思ふ心ありてなりけり。とかく言ひいひて、「波の立つなること」と憂へ言ひて、詠める歌、

行く先に立つ白波の声よりも遅れて泣かむ我や勝らむ

とぞ詠める。いと大声なるべし。持て来たる物よりは、歌はいかがあらむ。この歌を、これかれあはれがれども、一人も返しせず。しつべき人も交じれど、これをのみいたがり、物のみ食ひて、夜更けぬ。この歌主、「まだ罷らず」と言ひて立ちぬ。¹²⁾

とあり、名前も思い出せない人物になっている。詠んだ歌について感心した表情はするが、誰も返歌をせず、物だけ食べていたら歌主は気まずくなり、戻ってくると言って行ったり戻ってこなかったというような話が続く。そのうえ、その場にいた童が返し歌を歌ってこの話は締めくくられている。こどもの歌にも劣っているような歌だったのであろう。だが、実際のところ、歌に対して、どこが良く、どこが悪いかというような、まじめな批評が加えられているわけではなく、歌論書の体制が整っているとはいえない。しかし、歌についての主観が如実に表れていることには間違いない。

つまり、この七・八番歌のところから、歌に対する書き手の主観的な視点が浮彫りになっているといえることができる。しかも人への批判に滑稽さが増していく。まだ餞別を渡しにくる人が見られるが、九日が過ぎると、登場するのは乗船している人へと狭まる。

前述のように、12月、大津から船を出すところまでは、貫之は「前の守」として登場していることがわかる。それまでは餞別をしてくれる国人たちの誠意が話の中心を占めているため、前の守の行動にたいするこれといった照明はない。しかし、国境を越えてからは一転して船上での単調な暮らしが見られるのみで、いくら日記とはいえ、そのような状況の下で読ませるものを書くことは甚だ至難だったはずである。今井卓爾氏も言っているように、最初から旅の目的が事務的なものであっただけに、地域との接触も少なく、風土にたいしても意識的な立場をとることもほとんどなかった¹³⁾。萩谷朴氏は「貫之一行の土佐からの帰京の旅は、単にこの作品に、脚色自由な素材を提供したにとどまり、作者にはこの作品を紀行乃至紀行文学として完成させようとの意志は殆んどなかったものといえよう¹⁴⁾」とまで言っている。

すなわち、最初から紀行文を意識した旅ではなかったため、帰宅して日記を書くときは注意をひく素材が必要となり、そこで着目したのが記憶に残る数名の人であり、ことに、楳取と

12) 注6)のp.9

13) 今井卓爾「平安日記文学の風土」『国文学』第七卷第九、特集号平安文学の風土、学灯社、1962、p.30

14) 萩谷朴『土佐日記全注釈』解説部、角川書店、1984年版、p.480

船君とをその中心におき、結局、二人を笑い物に描き出しているのである。つまり、両者を軸にし、交互に照明をあてながら読ませる内容を作っているのである。そのうち、楫取については、「『土佐日記』における楫取蔑視の視座」という論文¹⁵⁾ですでに述べたところである。

三、前の守から船君へ

ここからは、楫取ほどではないが、航海の船上において、もう一つの話の軸を成している船君関連の内容に焦点をあて、論じてみたい。任地の土佐を離れる当初は前の守として名をあげ、まるで、絵の中にいたような人が、航海のなかにおいては船君へと名を変え、喜劇の中にある人へと生まれ変わっているのである。品川和子氏も、土佐の国を出てからは国司という官人意識から解放された貫之の想念に浮かぶのは、实景に見いだす屏風絵の興趣であったと言っており、また、

旅人紀貫之はまったくの自由人に変貌して、単調な海上生活に豊富な話題を与え、云々

と述べている¹⁶⁾。だが、解放感には手にしたのかもしれないが、船上の暮らしが豊富な話題を提供しているとはいえない。前の守として土佐を離れるときは、別れを惜しむたくさんの地元の人を登場させ、多大な餞を受け、善政を施した守として祭り上げられているが、船出してから楫取とのやり取りが比較的によく見られ、多様な人間関係は途切れてしまうのである。その分、楫取と船君に話題が集まり、笑いの対象になっていくのである。ことに、船上における二人の対立関係は読む人から笑いを醸し出させている。

船君の辞典的意味は、①船長。②船中の主君。その船旅の長である人、など¹⁷⁾である。すなわち、船君は普通名詞で、『万葉集』など、他の作品の中には採られていない。ここでは②の「船中の主君」「その船旅の長である人」にあたり、船においては前の守だった人が身分的に最も上位にあるはずで、ここでの「船君」が前の守と同人であることは周知するところである。

さて、前の守が名を変え「船君」の名をもってはじめて登場するのは正月14日である。雨が降って船を出せず、室津に足止めになっている場面である。

十四日。暁より雨降れば、同じ所に泊れり。

15) 関丙勲「『土佐日記』における楫取蔑視の視座」『日本語文学』第43輯、韓国日本語文学会、2009、pp.247～269

16) 品川和子『全訳注土佐日記』講談社学術文庫、講談社、1983、pp.285～287

17) <国語大事典(新装版)>市古貞次ほか編集、小学館、1988

船君、節忌す。精進物なければ、午刻より後に、楫取の昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米を取り掛けて、落ちられぬ。かゝること、なほありぬ。楫取、また鯛持て来たり。米、酒、しばしばくる。楫取、気色悪しからず。18)

精進をしたいが、野菜がなく、半日で精進落としをしたことを記している。ここでの「節忌(せちみ)」とは六斎日(ろくさいにち)のことで、仏教の戒めを断固に守るべき日であり、毎月の8・14・15・23・29・30日に信者たちは八戒(はっかい)を守っていた。八戒には、「昼過ぎの食事をとらないこと」との戒めがあり、しかも15日も節忌の日で、これに従えば、日記では午後になって精進落としをしているわけだから、八戒を守っていないことになる。天候が不順で船を出さずに室津に泊っているのだから、精進物がなかったというもおかしく、そのようなことが多かったところからは、楫取の鯛に釣られて信仰を疎かにした様子が露になっているのである。

貫之の信仰心の無さは、正月の節句に皆で食する品物を備えていないことにも見られるが、ことに2月5日、住吉のわたりを通るとき、強い風が吹いて船が進まなくなり、楫取の言う通りに、幣と大切にしていた鏡を海に投げ込んで悔しがる所に端的に現われている。住吉の明神にたいして「目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取の心は、神の御心なりけり」と、楫取と同等に、欲張りな神様であると諷刺しているところは、神にたいして畏敬の念を抱いているとはいえないものである。すなわち、六斎日の戒めを真剣に守らず、米と魚を取り替える行為は、やはり薄い信仰心からくるものと読み手に考えさせたいがためであろう。

また、楫取の鯛と船君の米の対応が、肉食を禁ずる日に限って物々交換の形で見られることには、より滑稽さが増す。2月8日も節忌の日で、魚と米が対応関係になっていることがわかる。鳥飼の御牧(みまぎ)という所に泊った時、魚と米に取り替える様子が見えており、船君にたいする皮肉めいた表現が続く。

今宵、船君、例の病おこりて、いたく悩む。ある人、鮮らかなる物持て来たり。米して返り事す。男ども、ひそかに言ふなり。「飯粒して魃つる」とや。かうやうのこと、所々にあり。今日、節忌すれば、魚不用。19)

船君は病気のためにひどく苦しみながらも、ある人が持ってきた魚をもらい、米でお返しをしたとある。ここでは、魚をもらっても役に立たないといって食べられないというようなことを言っているが、正月14日は同じく節忌の日なのに、関係なく午後から魚を食している。考えてみれば、精進明けまではまだ時間が残っているようだが、もう日が暮れ、持病が出たとあり、いくら貴重な「もつ」とはいえ、そのような状況では食べられるはずもない。しかも「飯粒してもつづる」という、男たちの陰口を挿入して船君を皮肉っているところに米と魚の対応関

18) 注6)のp.14

19) 注6)のp.28

係が如実に表されている。即断はできないが、船君を魚に目がない肉食ずきの者にしようとする意図が感じられる。もちろん、その裏面には、魚で得を取ろうとする楫取や、魚を持ってきた人に米をあげることから、船君の仁徳あふれる人間味を披露する意図があるのかもしれない。

1月21日の記には、海賊の仕返しを恐れ、髪が白けたと、大げさを言っている小心者の船君の姿が映っている。

かく言ひつつ行くに、船君なる人、波を見て、「国より始めて、海賊報みせむ、といふなることを思ふ上に、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十歳、八十歳は、海にあるものなりけり。

わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守
楫取、言へ」。20)

史実として、承平元年(931)の四月頃には海賊が出没はじめ、翌二年には、摂政藤原忠平が追捕海賊使に任ぜられている。しかし、海賊はその以降もつと猖獗し、承平三年(933)には南海諸国の警固使が制定されるなど、海賊討伐の対策が次々と下されている。すなわち、史実には見当たらないが、土佐の守の紀貫之が土佐近海に出没する盗賊を討伐したことは十分あり得る。だが、それに対する報復の恐れがあったにせよ、日記において船君を臆病者のように描き出している理由は、やはり、読ませるものにするための作意であろう。ここでも、軟弱で小心者の船君と、無心で無風流な楫取を対応させていることがみとれる。航海中で、性格は正反対で、滑稽の対象という共通点を持たせられた二人のイメージが観察できる。

さて、2月1日の記には、長旅の苦しさに堪えかねて、人が歌を詠むので船君が気晴らしに歌を詠む場面がある。当代屈指の歌人の貫之自身を船君として登場させ、その船君が歌った歌を貶すところに諧謔さが見出される。

また、船君の言はく、「この月までなりぬること」と嘆きて、苦しきに堪へずして、「人も言ふこと」とて、心やりに言へる、

曳く船の綱手の長き春の日を四十日五十日まで我は経にけり
聞く人の思へるやう、「なぞ、徒言なる」と、ひそかに言ふべし。「船君のからく捻り出だして、よし、と思へることを。怨じもこそし給べ」とて、つゝめきて止みぬ。

にはかに風波高ければ、留まりぬ。21)

自分から積極的に歌ったものではなく、他人の様子をうかがってから詠んだ歌で、それを聞いた人が思うことを想像して記している。「なんと無趣味でしょう」とこっそり言うに違いな

20) 注6)のp.18

21) 注6)のp.23

い、とか「船君がやっとひねり出して、自分では上手に詠んだと思っているのに」「怨まれたらいけない」として、こそこそ言ってやめた、など、消極的な態度と、趣きのない船君の下手な詠歌を揶揄するような内容になっている。『土佐日記』二番目の歌の前の守として詠じた歌の時と比べると、両者の扱いにあまりにも格差が感じられる。前の守の歌った歌については何の批評もなく、やはり、主人にたいする敬意を表すものとして、良し悪しを言わないのが当然かも知れない。それが、船君の歌った歌については主人の詠んだ歌であるにも関わらず、尊敬の念は探せない。前の守と船君とは呼称だけが違い、土佐の守だった貫之を示しているのは疑いのないことだが、作品の冒頭部とことではまったく別人のようなイメージを与えている。

貫之といえば誰もが知っている当代第一の歌人であり、そこから考えると、日記に虚構が加えられているとの解釈も可能である。しかし、だからといってこれを物語とはいわない。それは結局、読ませるものにするための工夫であり、自分自身を謙遜するための一種の方法であるものと考えられる。また、前の守から船君への変化は、長谷川政春氏が「虚構の方法を手に入れることによって、公を越えて私の領域を、あるいはその周辺世界の事象に対して、かなり自由に物が言える切符を得た²²⁾」と言っているように、公を越えて私の領域への移動を表すものなのかもしれない。

船君の詠歌の下手さを嘲弄する表現は2月6日の記にもある。やっと和泉の灘を抜け出し、難波に着いて河尻に入ると、船底に額をついていた淡路の島の大きい御という人が嬉しくなって、頭をもたげ、歌を詠んでいる。

いつしかといふせかりつる難波渦葦漕ぎ退けて御船来にけり 23)

普段、あまり歌を詠んでいない人だったので、人々は不思議に思ったが、船君は感心して褒めたとある。

いと思ひの外なる人の言へれば、人々怪しがる。これが中に、心地悩む船君、いたく賞でて、「船酔し給べりし御顔には、似ずもあるかな」と言ひける。

人々が淡路の島の大きい御という人が詠んだ歌に、感心したり誉めたりした様子はなく、妙な顔をしたとあるが、それとは裏腹に、気分を悪くしていた船君はとても感心して誉めたと記し、やはり常識はずれの態度を皮肉る雰囲気を作っている。

さらにその皮肉は翌日の7日の記に徹底している。川が乾いて船を進めにくくなり、悩んで

22) 長谷川政春「土佐日記の方法—紀行文学の発生と羈旅歌の伝統」『東横国文学』第14号、東横学院女子短期大学、1982、p.17

23) 注6)のp.27

いるときに、船君は連続して歌を二首詠んでいるが、淡路の島のたい御の歌に劣っていると貶されたり、自ら歌を詠んだことを後悔したりして、残念がる様子を見せている。

七日、今日、河尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水乾て、悩み患ふ。船の上ることいと難し。

かゝる間に、船君の病者、もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かゝれども、淡路専女の歌に賞でて、都誇りにもやあらむ、からくして、怪しき歌捻り出だせり。その歌は、

来と来ては川上り路の水を浅み船もわが身もなづむ今日かな
これは、病をすれば詠めるなるべし。一歌にことの飽かねば、今一つ、

疾くと思ふ船悩ますはわがために水の心の浅きなりけり
この歌は、都近くなりぬる喜びに堪へずして、言へるなるべし。「淡路の御の歌に劣れり。嫉き。言はざらましものを」と、悔しがらうちに、夜になりて寝にけり。24)

船君を「もとより無風流な人」と卑下したり、「和歌を詠むようなことは、まったく知らない人だった」、「やっとのことで、変な歌をひねり出した」など、滑稽の対象としていることが確認できる。久保稔氏は、「自らを無風流なものと隠し、一見まとはずれの二首添えることで、『いつしかと』と詠んだ老女を讃えるところをきわだたせ、(中略)老女のよろこびを自らのものに共有してゆく誇張表現である」と言っている25)。やや深読みともとれる論説だが、いずれにしてもここは、紀貫之の本来の姿ではないので、虚構であること間違いないが、それはあくまで、自分自身を卑下して日記に弾みを付けるための手法であり、結局読ませるものにしようとする意図からであろう。

ところが、船君と同一人物と見られる「船の長しける翁」に関する描写からは、あたかも別人を描いているような印象が強い。ある二人が、12日に室津に着いて、18日になるまで同じところに足止めになっている憂さを晴らしに詠んだ歌について、「船の長しける翁」は、まずまずのできばえと思って自ら歌を詠んでいる。

この歌どもを、少しよろし、と聞きて、船の長しける翁、月日ごろの苦しき心やりに詠める、

立つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつゝ人をはかるべらなる

この歌どもを、人の何かと言ふを、ある人聞きふけりて詠めり。その歌、詠める文字、三十文字あまり七文字。人みな、えあらで笑ふやうなり。歌主、いと気色悪しく怨ず。真似ども、え真似はず。書けりとも、え読み据ゑ難かるべし。今日だに言ひ難し。まして、後にはいかならむ。26)

これは、正月18日の記で、貫之が船君という名ではなく、「船の長しける翁」として登

24) 注6)のp.28

25) 久保稔「貫之の『老女』—その手法の陰翳について」『花葉』5、1988、p.18

26) 注6)のp.16

場している。船の長というところから、間違いなく、船君と同人であると推されるが、ここからは滑稽なイメージを探り得ない。歌についても「これらの歌について人たちがいろいろ批評する」と書いているだけで、滑稽の扱いはしていない。ここでは、三つの歌をじっと聞いてから、その後に歌を詠んでいる人の歌が滑稽の対象とされていることがわかる。その歌は三十七文字にもなり、皆に笑われ、機嫌が悪くなってぶつぶつ言っていたとある。つまり、ここでの「船の長しける翁」の批評は、前に詠まれた二首にたいする判詞の意味があるとの見解もあり、彼の行為や歌は批判されるようなものではないことがわかる。結局、船君の名を持たせられているときにだけ諧謔的な人物描写になっているといえることができる。

四、日記の文学化

『土佐日記』において比較的登場の多い人物に楫取と船君とがある。後任の守や講師、また、名前を持たせられている人が幾人もいるが、日記において存在感はなく、短編的な描写にとどまっていることがわかる。そのほかの何人かの童や女性に比べると、やはり、日記において楫取と船君とが主要人物になっていることは確かである。それは結局、当時として日記というのは事実を書き留めるメモ日誌のようなもので、虚構を採り入れられない躊躇いがあり、ありのままの事実を書くものだから、どうしても読ませるようなものにはなりにくかったのであろう。しかも紀行文のため、航海が始まってからは単調な暮らしになる。陸地の紀行であれば、歌枕などの名勝の地で幾らか話題が作られもするだろうが、海のなかだから余計に素材が乏しかったと思われる。そのために工夫し、思い当たったのがターゲットを定め、その対象を笑いを提供するものにしたのである。すなわち、それが楫取と船君だったわけである。

面白いのは、航海において二人は最も重要な存在で、楫取は言葉通り、楫を握っている立場であり、55日間にわたる長い旅路のなかで荒波や暴風から乗客の安全を守ってくれる存在である。また、船君は、航海技術は持たないが、身分からいえば指揮権を握っている人である。つまり、航海では最も中心的な二人だが、日記の笑い物に卑下されているところに、作品としての面白味が生れてくるのである。世間から見ると身分の差は明確であるが、楫取は人の気持を顧みない野暮で無頓着な性格の人として描き出され、船君は時に雰囲気への把握できない小心者として描き出されている。

このように、船君と楫取を滑稽の対象にして読み物の材料としたのは、仮名によるはじめの日記で、最初から文学としての位置づけを願った作品ではなく、たとえば和歌において俳諧歌が即座で詠まれて捨てられるように、そのような感覚で綴ったためではないだろうか。すなわち、余興的な意味を持っていたと考えられる。そのため、日記の最後に、

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。27)

とあり、「早く破ってしまおう」と言っているところから、この書が滑稽性を附与された俳諧歌のように、新しい散文であることを表すものと思われる。目崎徳衛氏は『土佐日記』における諧謔かつ卑猥な個所を取り上げ、次のように言っている。

これらの悪ふざけは貫之が従五位下前土佐守の身分をかなぐり捨てて、思い切ったのびのびと自由に物を書いてみたい文学的欲求を抑えなかったからであろう、誰に憚る必要もあつたわけではなく、ごく気のあつた友達にでも読ませようとしたもので、『古今集』や屏風歌の公的性格とは全く別の気楽な著作だつたと思われる28)。

『土佐日記』は、自由な立場から、物語のようなつれづれの慰みとして書いたもので、気楽に読まれる物を著したいという願望によって綴つた作品ということである。三谷栄一氏も、歌合日記のように、気楽な気分で和歌を中心に書きたいと思って、女性に擬したのかもしれないと言っている29)。また、伊庭京子氏が、

貫之達、古今歌人が技巧を徹底的に使いこなしたのは、日本語の持つたおやかさ、美しさを十分に知りぬいていたからであろう。漢詩全盛の風潮に対抗して和歌を再び復興させるためには、日本語独自の味わいを分からなければならない。その熱気を帯びて、貫之達は歌を作っていたにちがいない。そして単にそれだけに終ることなく、臨機応変に歌を詠みあげる力、ことばの持つ面白さ、事象の可笑しさを巧みにとりあげる機転をもその中に包含していったのである。30)

と述べているように、国風暗黒時代において歌人たちが和歌の拡散のために多様化に挑み、しかも貫之は仮名をもって漢文の堅苦しい文体に対抗しようとした結果として仮名日記が生成されるに至つたと考えられるのである。他、神谷かをる氏は、貫之は物語のジャンルを選ばず、日記というジャンルを意識的に選び取つたのは最も試みやすかつたジャンルであつたからだろうと言っている31)。しかし、それは日常における一介の人間の感じる旅の様子で、最初はまともな日記を文学として著作する意図があつたとは思われぬ。だからといって、読み手を意識していないというわけではなく、歌物語と和歌集の中間的なイメージを持たせており、一つの主題で二首の歌が連続する場面を作っているところは歌合を想像させ、それを旅の場面に持っていき、そこに諧謔性を負わせたものといふことができる。そのような手探りの試みが、新しい文芸を誕生させているのである。

27) 長谷川政春校注『土佐日記』「新日本古典文学大系」岩波書店、1989、p.33

28) 目崎徳衛『紀貫之』日本歴史学会編集、人物叢書、吉川弘文館、1985、pp.159～160

29) 三谷栄一『土佐日記』角川日本古典文庫、角川書店、1988年版、pp.94～95

30) 伊庭京子「貫之の歌の世界」『日本文芸研究』第三十四巻、第二号、関西大学日本文学会、1982、pp.17～18

31) 神谷かをる「土佐日記と物語文章史」『研究紀要』第十九集、光華女子大学、1981、pp.13～15

五、終わりに

『土佐日記』は、仮名によって、日記を文学へと導いた作品である。そこには、試行錯誤の跡が散見し、虚構を思わせる所をはじめ、歌合の形、俳諧歌的な滑稽性などが取り混ぜられていることがわかる。それらは新しい文学の誕生を促す多様な外的環境として理解できるのである。まるで、物語の親と言われる『竹取物語』が多岐の伝説や語源説話、また、史実を絡めて虚構化しているように、まだ、文学としては安定感のない様子を示している。作者を女性に仮託しながらもあらゆる所に男性の語り手の様子が見られ、紀行でありながらも、実際は風土を描くのに十分な準備がなされておらず、殆んど人物描写に焦点を合わせたり、詠歌の批評に集中したりする。

作品を読んでいくと、統一性に欠け、観点が女性の視角からいつからともなく男性の視角へと変わっていたり、ある地点から歌に対する批評が強まったり、それに伴う人への揶揄が増していく。また、貫之自身を表す呼び名も、最初は「前の守」だったのが中盤からは「船君」となり、あるところでは「船の長しける翁」とある。面白いのは、その扱い方が別個で、「前の守」のときは、官名がついているだけに事務的なイメージが強く、「船の長しける翁」の場合は、歌合の判者のような性格を帯びる。ところが、「船君」のときは、状況判断が鈍く、雰囲気把握できない小心者として描かれており、なにより、詠歌の力の無い存在として描かれている。しかもそこに滑稽性を加え、卑下している。貫之といえば当代第一の歌人だが、自分自身を諧謔的な人物に作り上げているのである。それは結局、航海という単調な暮らしだから素材が乏しく、そのために、楫取と船君とを滑稽なものに描いて、そこに読み物にしようという試みが生れたのであろう。

だからといって、最初から文学としての位置づけを願った作品とは思えず、前述したように、たとえば和歌において俳諧歌が即座で詠まれて捨てられるように、余興的な感覚で綴ったものと考えられる。そのために、最後のところに「忘れ難く、口惜きこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。」とあり、「早く破ってしまおう」と言っているのであろう。

【参考文献】

- 長谷川政春校注(1989)『土佐日記』 「新日本古典文学大系」岩波書店、pp.3～33
- 鈴木知太郎校注(1957)『土左日記』、「日本古典文学大系」岩波書店、p.15
- 松村誠一校注・訳(1973)『土佐日記』 「日本古典文学全集」小学館、p.6、31
- 村瀬敏夫訳注(1981)『現代語訳対照土佐日記』旺文社文庫、pp.147～148
- 品川和子(1983)『全訳注土佐日記』講談社学術文庫、講談社、pp.285～287
- 萩谷朴(1984)『土佐日記全注釈』角川書店、p.86、480
- 木村正中氏校注(1988)『土佐日記 貫之集』 「新潮日本古典集成」、pp.330～333
- 三谷栄一(1988)『土佐日記』角川日本古典文庫、角川書店、pp.94～95
- 今井卓爾(1962)「平安日記文学の風土」 『国文学』第七卷第九、特集号、平安文学の風土、学灯社、p.30
- 松田武夫(1968)「紀貫之」 『中古の和歌』所収、日本歌人講座2、弘文堂、p.133
- 神谷かをる(1981)「土佐日記と物語文章史」 『研究紀要』第十九集、光華女子大学、pp.13～15
- 長谷川政春(1982)「土佐日記の方法—紀行文学の発生と羈旅歌の伝統」 『東横国文学』第14号、東横学院女子短期大学、p.17
- 伊庭京子(1982)「貫之の歌の世界」 『日本文芸研究』第三十四卷、第二号、関西大学日本文学会、pp.17～18
- 目崎徳衛(1985)『紀貫之』日本歴史学会編集、人物叢書、吉川弘文館、pp.159～160
- 久保稔(1988)「貫之の『老女』—その手法の陰翳について」 『花葉』5、p.18
- 萩谷朴(2000)「虚構と歪曲の作品『土佐日記』」 『日本文学研究』第三十九号、大東文化大学日本文学会、p.2
- 関丙勲(2009)「『土佐日記』における楫取蔑視の視座」 『日本語文学』43輯、韓国日本語学会、pp.247～269
- _____ (2011)「『土佐日記』に見る送別の諸相」 『日本語文学』49輯、韓国日本語学会、pp.167～187
- 市古貞次ほか編集<国語大事典新装版>、小学館、1988

要 旨

『土佐日記』は、仮名によって、日記を文学へと導いた作品である。そこには、試行錯誤の跡が散見し、虚構を思わせる所をはじめ、歌合の形、俳諧歌的な滑稽性などが取り混ぜられていることがわかる。それらは新しい文学の誕生を促す多様な外的環境として理解される。まるで、物語の親と言われる『竹取物語』が多岐の伝説や語源説話、また、史実を絡せて虚構化しているように、まだ、文学としては安定感のない様子を示している。作者を女性に仮託しながらもあらゆる所に男性の語り手の様子が見え、紀行でありながらも、実際は風土を描くのに十分な準備がなされておらず、殆んど人物の描写に焦点を合わせたり、詠歌の批評に集中したりする。

作品を読んでいくと、統一性に欠け、観点が女性の視角からいつからともなく男性の視角へと変わっていたり、ある地点から歌に対する批評が強まったり、それにともなう人への揶揄が増していく。また、貫之自身を表す呼び名も最初は「前の守」だったのが、中盤からは「船君」となり、あるところでは「船の長しける翁」とある。面白いのは、その扱い方が別個で、「前の守」のときは、官名がついているだけに事務的なイメージが強く、「船の長しける翁」の場合は、歌合の判者のような性格を帯びる。ところが、「船君」のときは、状況判断が鈍く、雰囲気把握できない小心者として描かれており、なにより、詠歌の力の無い存在として描いている。しかもそこに滑稽性を加え、卑下している。貫之といえど当代第一の歌人だが、自分自身を諧謔的な人物に作り上げているのである。それは結局、航海という単調な暮らしだから素材が乏しく、そのために楫取と船君とを滑稽なものに描いて、そこに読み物にしようという試みが生れたのであろう。

だからといって、最初から文学としての位置づけを願った作品とは思えず、たとえば和歌において俳諧歌が即座で詠まれて捨てられるように、余興的な感覚で綴ったものと考えられる。そのために、最後のところに「忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。」とあり、「早く破ってしまおう」と言っているのであろう。

キーワード：貫之、前の守、船君、歌の批評、滑稽、日記の文学化

투 고 : 2012. 11. 30
1차 심사 : 2012. 12. 15
2차 심사 : 2013. 1. 5